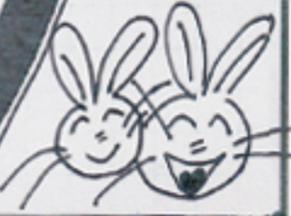


うさぎ文庫

2025年

3月号
うさぎ文庫



3月



4月18日の文庫日には入園入学の人にお花を準備しています。

3月は卒業、卒業の月にたまりまね。嬉しい気持ちと淋しい気持ちが交錯する季節です。また新たな出会いを期待しましょう！新しい自分にも出会えるはず！！

今年の啓誓は3月5日。地面の下で冬ごもりをしていた虫たちが春の目覚めを感ずるもどもどと土の中や顔を出してくると時期のことを意味する言葉ですが、まだまだ寒い日が続いている。でもひと雨ごとに少しずつ春に近づいて真冬の寒さとは違う空気を感ずります。

今年はまあまあ花粉の飛来が強い予報が出ています。菊川もあまののどがイガイガ...鼻がスズスズしてしまふおまけにまた鼻でんごし。アバラに

ヒビが入ってしまいました...トホホ...重いものを持ちたり、大声が出せません。風邪をひいて咳をするとヒビが骨折に進んでしまいかも。気が付いて生活してはいたが、きつと気持ちが悪く感じました。去年も派手に鼻でんごし。顔を負傷。お通りにあつぱん時間がわかりました。今年もか!?!ってことで...いろいろあって来月4月の文庫は個展です。ごめんね。

待ってたよお日やまぼかばか歩き出すわたし!

<曾野綾子さん> 2013年頃



生涯 軸のぶれない生き方を大切にしています。

偉大なおふたりの作家も天国へ召されました。



曾野綾子さんは70年以上第一線で執筆を続けられ、カリッの信仰を核に人間を見つめ続け、晩年には若いや成熟をテーマにしたエッセーも数多く執筆。50歳を過ぎてからは、世界の貧困地域を訪ね、支援活動もされていました。

昨年かうさぎ文庫でも何度も紹介しているせつけいさんとふりがかりさんとして谷川俊太郎さんとつながりました。この2月28日にはお別れにも有名な曾野綾子さんも93歳でお七十年(に)なりました。

「神の手がくれた手」や「天上の青」はお別れにも有名な石原慎太郎さんの対談を一緒にした「死という最後の未来」では、おふたりの考え方の違いがとても興味深く、考えさせられる作品です。うさぎ文庫にあります。死はまだまだ先の未来と思う若いみなさんにも心響く言葉がいくつもあつたと思います。

41歳頃頃の谷川さん



泣けばいいんだ泣けばいい
哀しいときは泣けばいい
泣けば葉の花涙にゆれる
泣けば鳥もカアと鳴く
泣けばいいんだ泣けばいい
ひとりときは泣けばいい
恋の唯一にとどけとばかり
風もいらいとむせび泣く
泣けばいいんだ泣けばいい
苦しいときは泣けばいい
泣いてどうなるのでもなにか
泣いてはうらやましい

1931年生れの谷川俊太郎さんは21歳の時に「二十億光年の孤独」でデビュー。詩に作詞にいつか笑いがこみあげる翻訳に多くの作品を残された。くはるかな国からやってくるよ

<谷川俊太郎さん> 2021年頃



谷川さんの講演会に行つたのはもう23年前のこと。70歳を感えていらしゃるとは思えぬくらい熱い語り。そして詩の朗読をしてくださった姿が忘れられません。